令和８年11月１日発行（毎月１日発行）

2026.11
（公社）富山県薬剤師会
広報誌

とみやく 富薬

11号
第48巻
No.448



ラッカセイ *Arachis hypogaea* L.　（マメ科 *Leguminosae*）

生　薬　ラッカセイ油（落花生油）　種子を粉砕、蒸熱し、圧搾する。油はろ過し、精製する。

成　分　脂肪酸：oleic acid, linoleic acid, palmitic acid, stearic acid, arachidic acid, hypogeic acid等。

効　能　軟膏、硬膏、リニメント剤などの製剤用基剤。良質の食用油。工業用として石鹸原料、繊維処理剤、研磨剤。

元富山県薬事研究所
薬用植物指導センター
村上守一氏　写真撮影

○○表紙について○○



新大陸原産の一風変わった植物です。１年草で、茎は根元で分枝し、地に広がり、長さ約60cm程度、葉は互生し、偶数羽状複葉で２対の小葉を持ちます。夏から秋にかけて無柄の黄色い蝶形花を開き、受精後５日目ころからは子房の一部（子房柄）が下方に伸びて地中に入り,その先端が長楕円形に肥大し、地中で豆果を実らせます。通常果実には１－３個の種子が入っています。花が落ちて地中で実を生むことから「落花生」の名前がつけられました。種小名のhypogaeaもギリシア語のhypo（下）＋geo（土）からなり地中に生じることを意味しています。

ラッカセイ属の野生種と見られる数種が自生する南米アンデス山脈の東麓ブラジルやボリビアが原産地と考えられ、早い時期にペルー北部に伝わり、メキシコではテワカン谷で紀元前３世紀の墓から出土が見られたことから紀元前には中央アメリカまでも広がり、新大陸発見前の15世紀には西インド諸島でも栽培されていました。新大陸発見後の15世紀末にはポルトガル人がインドネシアに、スペイン人がフィリピンに伝え、中国南部やマレーシア、インド、マダガスカルへと広まって行きました。16世紀には奴隷貿易の奴隷の食糧としてブラジルから西アフリカへと伝わり、同時期にスペインにも再び伝わり、南ヨーロッパに広まり、北アメリカ南部へは18世紀にインドから伝わりました。現在（2021）世界の落花生の生産量は約5,400万トンで、中国が約2,000万トンで33.9％を占め、２位はインドで約1,000万トン、ナイジェリアが３位で430万トンになっています。日本の落花生生産量14,800トンで比率は0.03％以下です。その内千葉県が13,400トンで85.4％を占めています。

ペルーでは多くの遺跡からラッカセイが出土しています。地域が乾燥しているペルーの太平洋岸の遺跡にラッカセイの莢実の出土記録が集中しています。子実は、種皮がごく薄く、また、特異な形をした細胞や組織もないので炭化した遺体の形態での判定は困難ですが、莢実のままなら鑑別は可能だからです。リマから640km北にある北部太平洋岸のサーニャ谷上流のニャンチョク谷遺跡（約10000年前）からラッカセイやカボチャ（*Cucurbita*）など数種の栽培植物の原種らしい遺体が発掘されています。またリマの北西42kmアンコン遺跡（約2800－2500年前）からは出土した土器の中から完全なラッカセイが発見されています。

中国への渡来ははっきりとは分りませんが、明代の万歴年間（1572－1620）のころに、福建や広東に伝わったと伝えられています。『物理小識』（1643）に「藤上に花を開き、絲が土に落ちて実となる。冬後に土を掘ってそれを取るのであるが、殻に紋があり、豆は黄白色で、炒熟すると甘香で松子の味に似ている」と「藤上に花を開き」とあるところは気になりますが、「絲が土に落ちて実になる」こと、「果実の殻に紋がある」ことなどラッカセイと符合する表現がみられ、17世紀前半には渡来していたと考えられます。

中国から日本に伝わった時期もはっきりしません。『遠碧軒記』（1675）には「落花星というものあなたより渡る。松子の類なり。相伝うこの花の露が地に落ちて、その処へ此実なると言い伝う。日本にて種てもはゆるなり」と生に星を使ったり、松の実の類など間違ったところはありますが、国内では最も古い記録とされています。他に『地錦抄付録』（1733）には「宝永３（1706）年、正徳中に渡来す」と、また『本朝世事談綺』（1734）に「元禄（1688－1704）の末渡来す」など諸説あるようですが17世紀末から18世紀始めには伝来していたと考えて間違いないようです。しかし、栽培は普及せず、明治７年（1874）にアメリカから種子が輸入され、東京近郊で作付けされ普及していきました。

（村上守一　記）